

トラック島夏島公学校国語授業
(本科一学年) 及び同朝会体操
出典：高坂喜一編『トラック島
寫真帖』(トラック教育支会、
1931年) / 奈良教育大学学術
情報研究センター図書館所蔵



れているという状況がしばらく続きます。このことはこの後、日本が海外に植民地を持つようになった時、そこに唱歌を普及させることに有利に働きます。なぜなら、日本が植民地にした地域にはその前からすでに讚美歌が普及していましたから、もしも唱歌が讚美歌の一変種一亜種でなかったなら、讚美歌に変わって普及させることがずつと困難になったと思われるからです。

§ 19 アジア太平洋で唱歌が果たした役割

—先生、そうなりますとこのように考えればよろしいのでしょうか。讚美歌が入ってきて、この在来の、と言っているのでしょうか、土着の音楽を潰していった、排除していった、と言うわけですね。今度は韓国の例を聞きますと、讚美歌が行ったのとはほぼ同じようなことを日本の唱歌は行ったわけですね。つまり韓国でチャンガが生まれてそれが充分育ちきらないうちに、それを禁止して、そのかわり日本の唱歌を歌わせた、そういう歴史ですよ。

なかなか鋭いですね。おっしゃる通りです。唱歌というのは面白いことに、讚美歌の影響により生まれきたわけですが、いったん成長すると、今おっしゃったように、今度は讚美歌がやったのと同じことを、アジア太平洋地域で行うことになりました。韓国では特にそのことがはっきりしています。日本が

植民地支配しましたので、教育は日本人がしました。学校では日本の唱歌を教えただけです。韓国のチャンガを歌わせないようにしました。韓国のチャンガをアンダーグラウンド、地下の音楽にしてしまった歴史があります。

もう一つ、僕が注目している地域として面白いのがミクロネシアです。ミクロネシアもやはり讚美歌がまず入ってきて、在来の歌舞が禁止されて、その代わり讚美歌が普及していった、その状況の時に今度は日本が委任統治によって、そこを支配することになったので、今度は日本人が唱歌を島々に持ち込んで、島の子どもたちに歌わせていったという歴史の積み重ねがあります。土着の歌を排除した讚美歌が定着して、その讚美歌を歌っていた人たちに日本の唱歌を歌わせる。

先ほどの話をもう一度くり返しますが、日本でも様々な種類の唱歌が試作されましたが、順調に成長出来たのは文部省が試作した唱歌だけでした。その一番の理由は、それが讚美歌に対抗出来るだけの魅力を持っていたからではないでしょうか。そうだとすると、ここで唱歌の重要な性質が一つ明らかになります。唱歌とは、讚美歌に対抗する歌であった、ということです。唱歌は讚美歌の代わりに人々の間に普及することの出来る歌であった。だからこそ、日本で独自に開発された唱歌は植民地の拡大とともに台湾、韓国、ミクロネシアへと進出することが出来たのではないのでしょうか。

こういうふうに考えますと、十八世紀後半から二十世紀にかけて讚美歌と唱歌とがアジア太平洋を舞台として関わった歴史というのは、歌の文化、広く言えば音楽

文化がどんなふうにならなうに変わっていったのか、どういふ原因で変わっていくのかを考へる時に非常に面白いケースを提供している、私はそのように思っています。

§ 20 今後の研究について

——最後に先生の今後のご研究の予定と、どのように発展していくのか、そのあたりをお話しいただけますか。

そうですね、実は今、後悔がないこともないのです。というのは、あまりにも大きなテーマを抱え込んでしまつて、地域も広いですし、まずそれが一番ですね。日本、韓国、中国、台湾、ハワイ、ポリネシアでは他に、タヒチ、トンガ、サモア、それからクック諸島も入ります。ミクロネシアでは、パラオとか、ヤップ、チューク、トラツク、いくつかありますが、パプアニューギニアとか、その近くのメラネシア、メラネシアは比較的キリスト教の影響が遅れたか、少し薄いとこゝろなんです、そこも見てみたいですね。それからニュージーランド、もともとマオリ族が住んでいたところですね。そういった人たちが讃美歌の影響を受けて彼らの音楽がどのようになつたかなど、そういうところを見てみたいですね。

こゝうした全体を見ることによつて、讃美歌の影響によつて、アジア太平洋の音楽が十八世紀後半からどのように変化してしまつたのか、そしてそれが現在どのような